

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	鈴木 功子
論文題目	現代アフリカ地域社会におけるケアの研究 ーエチオピア地方都市の住民と保健医療従事者のプライマリヘルスー		
（論文内容の要旨） 本論文は、エチオピアの地方都市の「プライマリヘルスケア」（人びとが基本的な保健医療衛生サービスを受けるための体制）について、保健普及員、中堅規模の医療施設、住民同士や相互扶助組織によるケアに焦点を当て、それぞれがどのような関係性を持ちながらケアを実践しているのかを明らかにしたものである。 第1章では、まず、国家の保健衛生の基礎となる保健普及プログラムや健康保険制度の概要と役割について触れ、保健医療政策の末端に位置する保健普及員が、国家と住民を接続する装置となって、コミュニティの健康に寄与していることを述べた。次に、調査地であるアルバミンチ市の特徴として、人口増加の著しい地方都市であること、マラリアなどの感染症だけでなく非感染性疾患を患う者もいること、移住者が多く近隣に血縁者が少ない貧困層が多いことを示した。 第2章では、保健普及員の活動について論じた。保健普及員は、政府のプログラムにそって保健衛生サービスをコミュニティに提供しようとしていたが、彼女たちの勤務実態調査から明らかになったことは、理想どおりに活動が進まない現実であった。人口に応じて配置されている保健普及員の半数が休職し、少ないマンパワーではコミュニティの多様なニーズに対応しきれず、その活動を母子保健や感染症対策に限定しなければならなかった。加えて、普及員には活動実績を定期的に報告する義務があるが、その事務作業が非常に多く過剰な負担となっていた。中高年世代には、糖尿病や脳卒中の後遺症などの慢性疾患を抱える住民もあり、このような健康課題にも対処しなければならないが、上記の理由から対応は困難であった。このような保健普及員の活動は、国家の保健衛生政策の恩恵に与れる者とそうでない者を生み、住民による保健普及員の活動に対する評価が低くなる要因となっていた。このため、保健普及員のなかには、他の医療職種への転職を希望して辞めていく者もいた。 第3章では、保健普及員とも連携する公立の医療機関の医療活動について、とくに、健康保険と薬剤の流通に着目した。住民は、基本的に健康保険に加入することで薬剤を無料で入手できるが、薬剤のサプライチェーンの不備によって薬剤を入手することが困難になっていた。年々高くなる保険料や薬剤流通の不安定さが、住民の保健加入への意思決定につながっていた。一方で、貧困ゆえに保険制度に加入できない住民に対して、スポンサー制度などの救済措置が講じられていた。このように医療機関は、医療行為を行うだけでなく、保健普及員やボランティアスタッフと連携し、医療保健			

制度から零れ落ちる人を減らす活動にも取り組んでいた。

第4章では、国家の制度を介さないケアとして、葬儀講や個人による幅広いケアについて示した。近年、新たに組織されている小規模な葬儀講の活動は、従来の葬儀講の活動を踏襲しつつ、日常生活をより良いものにするための活動を行っていた。また個人的なレベルのケアとして、コミュニティで社会関係を築いている住民同士が配慮し合い、障害者など長期にわたるケアが必要な人を支えている様を示した。

第5章では、新型コロナウイルス感染症に対して、住民がどのように対処したのかについて、住民にとって身近な感染症であるマラリアと、瞬く間に過去のものとなった「コロナ」と、類似点を見出せるのか見いだせないのかを考察した。マラリアは身体化された実践知があるのに対して、新型コロナウイルス感染症は実践知が皆無だったため、「コロナ」は人を忌避する際の言葉として発せられていた。一過性の新型コロナウイルス感染症に対しては、住民が関わり合うようなケアが醸成されることはなかった。

終章では、エチオピア地方都市での国家の制度によるプライマリヘルスケア、住民や相互扶助組織によるケアとの関係について総合的に検討した。エチオピアは、保健衛生政策によって国の隅々にまで医療保健サービスを届けることにある程度は成功したといえる。それでも、国家の制度の対象から外れてしまう者に対しては、保健普及員やボランティアスタッフなどが、コミュニティの一員として住民に働きかけ、ケアに寄与していることを論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、エチオピアの地方都市における「プライマリヘルスケア」をミクロな現場からとらえようとした研究の成果である。これまでの人類学や地域研究においては、プライマリヘルスケアが中心的なテーマとなることは少なく、その意味で、本論文はプライマリヘルスケアの民族誌として希少なものである。本論文の貢献は、以下のとおり大きく三つに分けられる。

一つ目は、プライマリヘルスケアを普及させた「成功例」であるエチオピアにおいて、その内実を知るために、地方都市の多様なケアの現場で調査し、議論したことである。とりわけ、これまで詳細な研究がほとんどない「保健普及員」に注目したことは重要である。彼女たちは、政府からの要請と地域住民からの要望の間で板挟みになりつつも、コミュニティの感染症対策や衛生環境を改善するために奮闘していた。本論文は、保健医療政策の末端にいる保健普及員たちこそが、多大な負荷を追いながら、エチオピアのプライマリヘルスケアをкаろうじて成り立たせている事実を説得的に明らかにしている。

二つ目は、エチオピアの医療システムのあり方とそれが抱える問題点について、具体的なデータを用いて提示したことである。著者は看護師の資格をもつため、プライマリホスピタルやヘルスセンターなどの医療施設の仕事を手伝いながら、医療従事者や患者に対して聞き取り調査と参与観察を行うことができた。その調査方法により、医療機関の多様な活動にアクセスが可能となっている。そして、プライマリホスピタルがボランティアスタッフなどと連携し、治療の必要な住民にアプローチする「ヘルスカバレッジ」の実現に努めていることや、エチオピア政府が推し進めている医療保険制度の問題点、薬剤サプライチェーンの課題などについて詳細に明らかにしている。

三つ目は、エチオピア地方都市の住民にとってのプライマリヘルスケアの諸相を明らかにしたことである。政府が提供できない種類のケアについて、住民たちは、近隣の人びとや親族による個人的な関係、葬儀講などの相互扶助組織に参加することでその不足を補おうとしていた。貧しい人びとが多い調査地区にあって、それらのケアは完全にはほど遠いものの、住民同士のケアなしでは成り立たない厳しい生活状況が明らかにされた。また本論文は、新型コロナウイルス感染症について、住民がそれを恐怖から黙殺したため相互扶助的なケアが醸成されなかったことや、マラリアなど古くからある疾病については住民間のケアが活発に行われ、近代医療のみならず薬草など伝統医療も利用されるなど、人びとの一様ではない疾病対応についても記されている。

以上のように、本論文は、世界的に注目されるプライマリヘルスケアについて、医療従事者、地域住民、地域と医療施設をつなぐボランティアスタッフ、葬儀講のような組織にまで広げて包括的にアプローチすることにより、住民を取り巻く重層的なケアの在

り様を描くことに成功している。また本論文は、プライマリヘルスのよりよい実現のために、コミュニティを熟知しかつコミュニティから大いに期待されている保健普及員の待遇改善や、増えつつある非感染性疾患への支援拡大などの重要性を説いている。このように本研究は、医療人類学やアフリカ地域研究への貢献はもちろん、途上国で医療に携わる実務家などにも貴重な示唆を与えるものであるといえる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2025年3月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。